『ドストエフスキー　父殺しの文学（上・下）』

亀山郁夫著

日本放送出版協会　二〇〇四年

亀山郁夫氏による最新の著作は、その対象であるドストエフスキーという作家への肉迫を随所に感じさせてくれる作品である。フレーブニコフ、マヤコフスキーなどロシア前衛詩の研究の第一人者として知られる文学者が、十九世紀ロシア文学の根幹ともいうべくドストエフスキーへ関心領域を拡張した、と本著を捉えるべきではない。なぜなら、この作品は、長年「憑りつかれていた」作家に体当たりとでもいうべく姿勢で、亀山氏が取り組んだ著作であるからである。『甦るフレーブニコフ』（晶文社、一九八九年）から『破滅のマヤコフスキー』（筑摩書房、一九九八年）に至る系譜において看取されるように、同氏が、「ロシア・アヴァンギャルド」というひとつの運動体、とりわけ詩人たちの営為の探求に精力を注ぎ、そして近年は「スターリン学」の樹立を宣言するなど、二〇世紀のロシア文化全体をも視野に収めていることは周知である。だが、『ドストエフスキー　父殺しの文学』という大作は、著者にとって、ドストエフスキーという偉大なる散文作家への「回帰」を意味する。そう、これは「回帰」である。『甦えるフレーブニコフ』の「あとがき」で、学生時代に「ドストエフスキーという情念の牢獄」からできるだけ遠くへ離れようとして、ロシア・モダニズムの詩人たちに没頭するようになったという旨が記されている。だが同時に、それは、著者自身も認めるように、「ドストエフスキー的パラダイム」からの逃亡でもあった。そして、幾年の時間を経て、ドストエフスキーに「回帰」したのである。その間に集積された資料と知識を十分に活用するのみならず、錬成された読みによって、「NHKブックス」では稀有な上下全二巻という大作の完成を見たのである。

本書は、タイトルに示されているように、「父親殺し」という主題をめぐって、ドストエフスキーの作品全体を通して考察が進められている。特徴的であるのが、『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』といった名作のみならず、『他人の女房とベッドの下の亭主』や『永遠の夫』といった一般的にはあまりなじみのない中短編までをも考察の射程に収めることで、ドストエフスキーという作家の新たな全体像を見事に映し出している点である。適宜フロイト、ジラールなどに依拠しながらも、基本的には独自の読みを進め、「父」の問題をありとあらゆる作品の細部から徹底的に読み解こうとする著者の姿勢は敬服に値する。

全体は十二講から成り、それぞれの講が「事件と証言」、「伝記」、「テクスト」、「講義」を展開しており、本著の構成そのものも独自なものとなっている。「事件と証言」では作品と関連する事件など、当時のロシア社会の情勢が簡潔に描かれ、「伝記」では広範な資料に依拠して、父との関係を照射しながら、ドストエフスキー自身の生涯を再構成している。「テクスト」は、分析対象となる作品の概要が語られ、それに続く「講義」では、文字通り目の前にいる「読者」

に語りかけるかのように、軽やかな文体で持論が展開されるといった流れになっている。さらに「プロローグ」と「エピローグ」という《紀行文》が挿入されることで、本書はより味わい深いものとなっている。テクストの世界を飛び出し、ドストエフスキーの息吹が感じられる空間をみずからの足で訪れた著者の経験が、鮮やかに文章に投影されているためである。

複数の作品において重層的に繰り広げられる「父殺し」という問題の考察は、当然のことながら、ドストエフスキーというひとりの作家の研究という範疇で収まるものではなく、ロシア文化という広大なフィールドにおいてこそ検討されるべきものかもしれない。そのため、「事件と証言」の項目は、テクストから社会事象への広がりを示してくれるひとつの指標となっている。著者は作家と同時代の事象を重ねあわせ、現代の状況への関係付けは最小限にとどめているが、本著で展開された議論は、現代のロシアの状況にも適用することが可能であろう。本著の出版と前後して都内で公開されたあるロシア映画に触れることは、その意味合いを際立たせてくれるかもしれない。一九六四年シベリアのノヴォシビルスク生まれのアンドレイ・ズビャギンツェフ監督作品、『父、帰る』と題された映画（原題はロシア語で「帰還」）は、現代のロシアを舞台にした「父」の不在と取り上げた作品であるが、この映画と亀山氏の著作を重ねあわせてみると、ロシア文化における「父」へ思いをめぐらさざるをえない。「帝国」、「皇帝」が失墜していく十九世紀、「共産主義」、「ソ連邦」が瓦解していった前世紀の事象が、「父性」の模索という一点で共鳴しあっているように思われるからである。「父」という問題は、今日のロシア文化を考えるうえでも非常に重要であり、まさにこのような観点からドストエフスキーの全体像を照射しようとした本書は、単なる一作家の研究書としてのみならず、現代的な価値が付与されている。換言すると、それだけの思索を促がすドストエフスキーという作家の懐の深さをあらためて認識させてくれるのである。

最後に、著者にとっての「父」とは何かという問題がある。端的に言うと、亀山氏にとっての「父」は、ある意味で触れることのできない《ドストエフスキー》であったのかもしれない。魅了されながらも、ある程度の距離を置き、だが思いを寄せずにはいられない存在。ドストエフスキーはそのような意味で著者にとっての「師」であり、「ライバル」でもあったようにも思える。仮にそうだとしたら、「父」の克服を企図した本書の執筆は、様々な面で困難を伴う営為である。「あとがき」で著者の恩師である故・原卓也氏が的確に指摘しているように、後ろ姿をつねに眺めているがゆえに、作者に陶酔してしまう危険性がつねに存在するからである。しかし、あえてその岸壁に取り組み、新たな視点から「父」ドストエフスキーの後ろ姿を追い求める著者の姿勢に敬意を表したい。

（阿部賢一）